



幼児と性差

吉田三紀子

——女らしさ——

以前、私が勤務していた保育所に、女の子でありながら自分のことを「僕」と呼ぶ子どもがいた。三才になったばかりで入園し、年くらい保育所で生活した。その後転居のため退園してしまっただが、その間「悦ちゃんは女の子?」、「うん、僕女の子よ」と、こんな奇妙な会話が何度か聞かされたものである。ついに退園するまで「僕」をやめなかった。二つ年上の兄ちゃんと、とても仲良しの兄妹で、いつも一しょに走りまわり、跳びまわり、泣く時も兄妹一しょという始末だった。ほほの真つ赤な、まさに金太郎のような子どもで、保母の間でもっばらそう呼んでいた。しかし両親をはじめ周囲のおとな達は笑いごとではすませない問題であり、どうしたら

女の子らしくなるかと本気で心配していた。僕を私に改めるよう、その度ごとに注意されるので、とても神経質になったこともある。兄から離れてなるべく他の女の子達のグループに入れてあげるよう心がけていたが「僕」はやっぱり「僕」のままだった。

しかし、この子どもの行動をそれとなく観察してみると、やはり女の子だと思われる点が多くあった。ままごと遊びをしている時は、いつも小さなお母さん役を上手に演じていたし、髪にリボンをつけたくて駄々をこねたこともある。またある時はお兄ちゃんの茶色の服を借着して登園した日、皆に「男の服 男の服」とはやされ、もう絶対にその服を着ないと言って保母を困らせることもあった。こんな悦ちゃんを毎日眺めていて、小さくても女の子はやはり女の子だなどつくづく考えさせられたものである。

女兒のくせに僕と言うこととか、しばしば見られた男性的行動も

仲良しの兄によって影響されたものと思うが、やはり女性らしい面の多々見られたことは、幼児の性格行動といったものが、人的環境あるいは身体的性差などによって強く支配されていることがうかがえる。すなわち、男性的環境の中において育てられた女兒は、多分に男性的行動をし、男性的性格をおびてくるが、やはり女らしい面はなんらかの形で表現され、女はやはり女であるという感じをつよくするのである。

そこで男らしさ、女らしさとなげなくいってしまえばそれまでのことであるが、男らしさとは何を指すか、女らしさとは何をいっているのかと深く考えてみると、その内容は非常に複雑なものであることがわかる。そしてまた反面非常に興味ある問題にも思えてくる。正しい幼児教育のあり方を考えた場合、我々が決して見過ごしてはならない重要な問題でもある。女らしさの内容となるものは、持って生まれた女性としての性格と、社会が女性に要求したところのものであると思う。この二つの要素を明瞭に分析することは容易なことではないが、幼児教育の立場から考えるところといった女らしさ、男らしさをあえて分析的に考えていく必要があると思う。

—— 服装と性差 ——

最近、町を歩いていると、今のは男性かしら、それとも女性かな

と思わず首をかしげることがある。我々がまず性別を判断するのは服装であろう。だんだんと男女の服装が接近してきて、区別がむずかしいは判断できるのが普通である。Yシャツ、ネクタイは男性のものであり、スカートはまだ絶対に女性のものである。また、洋服の前合せの方法が右前、左前と性別にはっきり決められている。このように服装は性によって区別されているが、男性と女性とで違う服を着るようになったことについては従来から西欧においていろいろな説がある。例えば、ボタンかけ（前合せ）の性による相違については次のような説がある。すなわち、戦闘する男性が時々右手を休めるため、ふところ手をして手を温める。左前の上衣はそういった行動を考慮してつくられたとされている。また、婦人服にみられる右前合せは、婦人が抱いている乳児に授乳するための便利を考慮してつくられたとされている。それはともかくとして結局は服装そのものもがもつ生理的要因と社会的要因にもとづくものと考えればまちがいないであろう。これらの差別は幼稚園の制服にもみられ、乳児の服装にもみられる。生まれたばかりの赤ちゃんにも、坊やだから青い帽子をあげましょう、女の子だからピンクのおくるみにしよう、いやどちらでも間に合うように黄色い毛布に……と我々はしばしば考えては口にしてはいる。社会的習慣にもとづいて、なにげなくそう考え込んでしまっている。そしてこのようなおとなの考えが、

またそのまま乳児の時代から伝えられ受けつがれている。園児の服装が性によって非常に異なることは今更いうまでもないが、それが社会的習慣に由来することであると同時に、それが更に展開して、幼児自身の要求にまで発展してきていることを意識する必要があると思う。スカートをはくこと自身、女児の要求から出発していることが多い。寒い日に母がズボンをはくようすすめても女児の場合、やはりスカートをはきたがる。これは女性とはどのような服装をするものであるかということ、園児自身よく理解しており、それに抵抗することなく、進んでそれに自己をあてはめていこうとする傾向が感ぜられる。すなわち、女性はいくらか女性らしく、男性はいくらか男性らしく見せようとしているかのように思える。

—— 色調と性差 ——

服装が社会的習慣によって男女区別されているように、人の用いる物の色彩についても社会的習慣にもとづく性差があるようである。前述のような乳児の服装にみられる色彩についてもいえるように、一般的にいつて人々は女児の場合赤、ピンクなどのあでやかな色を、男児の場合比較的地味な色を用いることを期待しているようである。幼児の色彩に対する好みを調査してみるとふしぎなことには、男女児とも一般の人々の期待するところの色彩を求めているこ

とがわかる。たとえば、幼児に好きな色の紙をとりましようというとき、男の子はブルー、黒、グレーなどをとり、女の子はピンク、赤を殆んどの子どもが選ぶ。本当に好きでその色を選ぶのか、あるいは男らしい色、女らしい色としての社会的要求に反影して選んだのかは不明である。いずれにしても性によって選ぶ色が異っていることは事実である。だんだんと世の中が変ると共に服装、持物などの色調が変わってきているが、やはり性別は認められ、保育所の中でも「○○君は赤い服着てるからおかしいね」とか、「○○君は女の子の靴下はいてるよ」とか、なかなかその区別についてはきびしい。

これらの事実を考えると、生まれながらにして女児はあでやかな色調を好み、男児は地味な色調を好むものであると考えがたい。むしろこういった色調に対する好みの性差は後天的なもので、社会的要求にもとづくものと考えられる。この場合、前述の服装の場合と同様に幼児自身このような社会的要求に自ら進んで応えている点に興味がある。幼児自身の中に、男児は社会の要求するところの男性らしくなりたい、女児はまた、社会の要求するところの女性になりたいという本能的なものが存在するように思える。

—— 絵画と性差 ——

幼児に絵を描かせてみると性別によって異なる面がしばしば見いだ

される。絵日記などをみると、女兒はとかく絵に花を添える傾向がつよい。またやたらに女兒の姿を描きこむ。特に女兒の髪型には細心の注意をはらっている。男児の場合は絵のどこかに飛行機があらわれたり、戦争をしている様子をよく描く。すなわち総括的にみると女兒の絵にはやさしさが表現され、男児の絵には激しさが表現されているように思える。世の中が変るにしたがって、幼児の描く絵も変ってきている。私共が幼い頃はよくオカッパ頭のお人形を描いたし、男の子は落下傘や戦車をよく描いていた。現在幼児の絵をみると、同じお人形でも髪などずいぶん違うし、男の子はもっぱらロケット、ヘリコプターである。しかし、世の中の変移に伴って画材もそれぞれに変わりつつもやはり男女の間には明らかな違いがあり、女の子は決してロケットを描こうとはしない。ここにおいても社会的要求に進んで応ずる幼児の本質がうかがえる。この現象は男児自身の中に、男性に対する社会的要求を受け入れる素地のあることを示すもので、下地のないものにくら特定条件をおしつけても決して容易にそれを受け入れるものではあるまい。女兒自身の中にも、女性に対する社会的要求を受け入れる素地が十二分にそなわっていると考えるべきである。このように考えると社会的要求が性の本質から決して遊離したものではないことを知ることができる。この点については後になって更に検討を加えたい。

——遊びと性差——

保育所で幼児の遊びの好みをしらべてみると、一般に男児は虫とり、ベースボール、すもう、ハンドカーなど動的な遊びを好み、女兒はブランコ、ジャングル、ままごとなどといったような静的遊びを好む傾向がある。すなわち、遊びの好みに明らかな性的相違がみとめられる。このような状態を眺めていると、いかにも自然にみえる。すこしも不自然に見えないということは、我々の幼児に対する無意識の期待に幼児自身がよく応えてくれていることを意味すると思う。遊びの好みに男女差の著しいのは、比較的自由放任式の保育指針をとっているところで、ある特定の保育指針を打ちたてているところではややもすれば幼児の日常生活に不自然さがあるが、われはこれは性別による本質的相違を無視し、男女児を本質的に同一視したことから生じたものとして考えられない。男児に女性的遊びをおしつけた場合、男児がどのような形でそれに抵抗するかを詳細に観察する必要があると思う。その反応の仕方度合によって、男児にそれを受け入れる素地が本質的にどの程度存在するかを知ることができる。受け入れる素地のないものを無理に受け入れさせようとすると、そこに不自然さを生じ、その幼児の本質展開をきまただげ、神経質な、反抗的な、あるいは無気力な性格形成を助成することに

なるように思える。

保育所における一番重要な時間は自由遊びの時間である。保母はこの時間を単に自由に遊ばせる時と考えないで、幼児の本質を見きわめる時間として見るべきであろう。自然な幼児の行動が理解できた場合には更に種々なる素材を与え、自由な状態において幼児がその素材に対し、どのような反応を示すかを調べるべきだと思う。そうすることによって、男児、女児の性的相違を正しく把握することができ、更に正しい保育指針を確立することもできうと思う。

最近、紙で折った飛行機をとばして、交通事故にあった痛ましい事件が目前に起り、まだ三才になったばかりの幼児であったが、男の子特有の遊びをすでに好んでいたようだ。幼児の交通事故の原因そのものについても遊びの性差に関係が深い。このような問題についても保育者自身十分に注意を払う必要がある。また、だいぶ前のことであるが、保育所における動物・植物について調査したことがある。

その際、幼児にそれらの名前をたずねると、その正解率において明らかな性的相違がみいだされた。すなわち、男児は女児よりも動物名をよく知っており、女児は男児より植物名をよく知っていた。

このような正解率にみられる性差は幼児の遊びと密接な関係がある。男児は虫とり遊びを好み、女児は花つみなどを好む。このようなことが正解率の性差の原因になるものと考えられる。遊びの性的

相違が知識の面にまで発展してくることは必然的現象であり、幼小一貫の教育を考える場合、幼児の時代における遊びの性差の問題は、いろいろなケースにおいて十分考慮される必要があると思う。

—— 体力と性差 ——

従来、男児の平均身長、体重、胸囲などが常に女児よりまさっていることが明らかにされている。そのためか走る、跳ぶ、投げるなどの運動能力も男児の方がより優れている。このような体力的な性的差異は時代の変化にもなつて多少の変化はあるが、それはあくまでもその差の度合の変化であり、その関係が逆になるようなことはない。例えば、成人の身長について、昭和二十年と昭和三十年とを比較してみると、男子は〇・七cm増しており、女子は一・二cm増している。したがって男女の間には、ややその差が縮ってきてはいるがやはり女性よりも男性が高い。生活状態が変わり人間の体質もいろいろ変化しつつあるが、いつの時代にも体力的性差というものは存在している。このように考えてみると、体力の上にあられた性差は後天的なものがあることも否定できないが、一般的にはやはり先天的なものが本質であるとしか考えられない。「弱きものよ、汝の名は女なり」とシェクスピアの言ったとおりになりそうである。

前述のように、幼児の行動には一般的にいつて明瞭な性差がみと

められる。もちろんその程度が個人によって異なることは今更言うまでもない。幼児の遊びの種類について、個人的に、あるいは性別に検討を加えてみると、幼児の体力というものが遊びの選択に重要な意味をもつことが明らかになった。このことについての詳細はすでに本誌にも報告したことがあるが、*男女共同の生活の場である保育所において両性の相互関係というものが非常におもしろく観察される。すなわち、一般的にいつて女兒がそれぞれ好む遊びを十分に堪能できることは珍らしく、男児は自分達の遊びに飽きるとしばしば女兒の遊んでいる玩具に侵入し女兒を追い出してしまふ。珍らしいもの、新しいものはまず男児が占有し、女兒は男児が飽きるのを待つといったケースが多いようである。おとなの目が届いていない幼児だけの集団内ではこのような行動がしばしばくりかえされている。このような現象は集団の大きさから生ずる力というものも考慮に入れる必要があるが、一般的にみてやはり男児と女兒の体力的相連に由来するもののように考えられる。保育所において男女児とも平等の資格のもとにおいて生活する権利があるとすれば、男児優位女兒劣位の関係を保母がたくみにさばいてゆき、平等の利益を与えるようにしなければならないと思う。(※9巻1号 樋口三紀子)

私は最近ある保育所において次のような観察をした。百人余り園児のいる保育所に三輪車が一台あった。その三輪車がどのように使われているか調べてみた。その結果は次のとおりである。すなわち

三輪車が一台しかないために幼児相互間に三輪車の奪い合いがおこる。そして三輪車を奪う児と奪われる児との間には、一位から十位までの順序がみいだされた。このような順位は個人間の体力差に由来する場合が多いように思う。場合によってはこの順位が変化することがある。その原因には兄とか保母といった強い力が加わっている。この順位の一位と三位までは年長児であった。この場合同年令の男児同志の間では順位差をみいだすことはできなかった。しかし同年令男女女兒の間では男児が上位であり女兒が下位であった。男児が女兒よりも体力的に優位であることが、この場合においても説明されるように思える。したがって、遊びにみられる男児優位、女兒劣位の関係、すなわち性的優劣関係は、ある意味において体力的優劣関係におきかえて説明することもできると思う。

いろいろの面に表現された幼児の体力的性差は幼児の生活に根強く影響しているものであり、保育上十分に考慮する必要がある。今、三輪車の奪われる関係から生じた順位関係について考えてみよう。上位のものは支配的、指導的、自己主張的能力は自然に助長されるであろうが、協調的、妥協的性格に欠けてくるかもしれない。また逆に下位のものは協調性、妥協性に富むことは考えられるが指導性などにおいて著しく欠けた性格ができればあるのではあるまいか。体力的性差が性格形成に重要な役割を演ずることを知るとき、保母の責任の重大さをあらためて痛感するのである。

遊びの飽きと性差 —

幼児の遊びを観察しているとそれぞれの遊びに飽きる状態に性的な相違がみいだされる。たとえば、ブランコ、ジャングル遊びなどをみていると、男児は女児にくらべて非常に飽きやすく数分間で他の遊びに移る。女児は長い場合それらの遊びを四〇分も五〇分も続けている。すなわち、一般的にいつて男児は単純な遊びを長時間持続することができず、動的な刺激的な遊びを好むようである。逆に女児は単純な遊びを長時間続ける能力をそなえているように思える。このような単調な内容をもつ遊びに対する持続性、持久力といったものが幼児の性的相違に表現されたことはきわめて興味あることと思う。このような形で表現された性差は、おとなの世界にもあてはまるものである。女児のねばり強さ、男児の飽きっぽさといったものがある意味でそれぞれ生理的條件の性的差異にもとづくもののように思える。すなわちそれらは、社会的要求から発展したものでなく、本質的なものからめばえたものであろう。このような持久力というものは、前述の体力とは性質の異なることは言うまでもない。女児が男児よりも高い持久力をもつことについては考えさせられる問題が多々ある。女性が体力的に男性より劣っていることはすでに述べたが耐久力、持久力という立場で考えると、女性が必ずず

しも男性より弱いものではないことがわかる。というのは出生率において男児が著しく高いのに死亡率がまた男児の方が高い。

しかもレンツ及びその門下のシルマーらの研究によると、一般の乳幼児死亡率と男児死亡超過率とが相反の關係にあるという。一般乳幼児死亡率の高い国というのは氣候、風土その他環境がよくないと考えられ、外的要因にもとづく死亡が多いと考えられる。また外的環境のよい国では乳児の生死が主として内的、體質的條件にもとづくと考えられる。そこでこのような乳幼児死亡率と男児死亡超過率とが相反の關係にあるということを考えると、男児がより死亡しやすいということは體質的な内的條件によるものが多いと考えられる。寿命についても、女性が男性よりも長く、男女の間には生きる力において相だなひらきのあることがわかる。こういったことが女児の持久力の内因になっているのではないかと考えられる。

— 男らしさと女らしさ —

前述の各事項から幼児にみられた男らしさ女らしさというものは性そのものに由来するものと、社会的な役割期待およびその期待効果によってもしだされたものと言えよう。社会的役割期待は、時代の背景によって異なることは歴史の証明するところである。

ニューギニアのある島では、男児が人形遊び、女児が乱暴な遊び

をしているという。こうした場合、その社会的背景が問題になる。

そこでは母親が農業に従事し、父親は早朝漁業をやると昼間は優しく子どもの保育にあたっていているのである。このような例から考えても、いかに社会的背景というものが幼児の行動に大きな影響力をもっているかがわかる。このことについて更に追求してみよう。

私の父は、私が生まれる時、まだ数カ月も前から名前を一生懸命考えていたそうである。しかもその名前は女の子の名前ばかりで、もし男の子だったら生まれてから考えると言って男の子の名前は全然考えていなかったそうである。父は生まれてくる子どもを女の子と勝手に決めてしまっていたようである。幸い私が女の性を受けて生まれてきたからよかったが、もし男の子だったらあまり可愛いがられなかったかも知れないと時々母とじょうだんを言うのである。

父は結局戦争で命を失なったけれど大の反戦論者であり、当時の社会の状況から判断して男の子を欲しいと思わなかったようである。世の中が平和になった現在においても生まれてくる子どもの性はやはり気になるものである。男の子か、女の子かをこのように気にするのは、男女両性の社会的役割がきわめてはっきりしていることに原因しているように思う。「女のくせに」ということばは社会史が生んだ女性の存在をよく表わしている。すなわち、古来日本においては社会的に女性は低い地位におかれ、つねに男性に比べて劣等視される傾向があった。このことを考えてみると男性中心の闘争を軸

とした社会的背景における必然的結果であることがわかる。戦後、「くつしたと女が強くなった」と言われるように、最近になって女性に対する劣等視の傾向は弱まって、男女同権思想が流れはじめたが、まだまだ型だけの感はまぬがれない。先日テレビ劇をみていたら、こんな台詞があった。「近頃、あの娘はずい分よく勉強するようになった。あれが男の子だったら……」というのである。こういった現況は未だ古来日本の社会的概念が根強く残っていることを示すもので、近代における男性および女性の役割について十二分に検討を加える必要があると思う。したがって近代人の期待するところの眞の男らしさ、女らしさというのは、そのような検討の結果によって定義づけられるものでなければならない。

いま一般に言われる男らしさ、女らしさというものは、前述のような現況における社会的役割期待に添うものであり、そういう男らしさ、女らしさを両親あるいは社会が要求し期待している。社会生活に適應する男の子・女の子を望むのは当然である。しかし社会は常にvari進歩している。そして次の社会を作るのは現在の幼児であり、その幼児の成育を助長するのはおとなの務めである。考えてみればみる程むずかしい仕事であり重要な問題である。現在の幼児に求める男らしさ、女らしさは、ただ単に現在の社会に適應する性役割を考えてのものであってはならない。保育者はあくまでも将来に目をむけて、近代的な男らしさ・女らしさを考えてゆく必要があると思う。